

ダビデの最後の言葉

(1列王2・11~11)

一、ダビデの最後の言葉

ダビデはそれまでの人生において幾度も困った出来事に遭遇しました。その一人はダビデ王の側近で、軍団の長であった將軍ヨアブです。立場としてはダビデ王の下ですが、強烈な統率力があり、戦術においても秀でたものを持っていたヨアブを、ダビデ王は持て余していたようです。

その、ヨアブのことで、ダビデは息子ソロモンに言葉を残しています。5節、6節です。また、あなたはツエルヤの子ヨアブが私にしたこと、すなわち、彼がイスラエルのふたりの將軍、ネルの子アブネルとエテルの子アマサとにしたことを知っている。彼は彼らを虐殺し、平和な時に、戦いの血を流し、自分の腰の帯と足のくつに戦いの血をつけたのだ。だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない。」と。アブネルとはサウル王時代の將軍で、ヨアブと並ぶ人物です。

サウル王の死後、イスラエルの將軍であり実力者であったアブネルはダビデ王に寝返り、アブネルが率いるイスラエルがダビデ王の下に合流しようとなりました。ところが、ダビデ王の部下で

將軍ヨアブが、イスラエルの將軍アブネルを殺害してしまいました。これには、ダビデはかなり心を痛めたと思われまます。しかしダビデ王は將軍ヨアブを処分することができませんでした。

その後のことです。ヨアブは、ダビデ王がヨアブに代わって將軍として立てたアマサを殺害してしまいました。こういうことを、死期が近づくまで覚えていたのです。当然と言えば当然です。そして、自分からは手を下すことができないため、息子であるソロモンに「だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない」と語ったのでした。これは、神に御心になつた知恵なのでしょうか。列王記ははっきり語っていません。ですが、列王記の著者は、ダビデがソロモンに諭したことをよしとしているようにも見えます。それが12節です。ソロモンは父ダビデの王座に着き、その王位は確立した。」とあります。こういうところに、旧約聖書の限界を見ます。神の御意思は旧約時代の、預言者を通して語られましたが、その預言者は、神の御意思を完全にあらわすには至りませんでした。神の言葉は、神御自身であられる御子イエス・キリストによってあらわされました。

二、福音の光に照らして

そこで、きょうの聖書箇所は新約の

光を当ててみたいと思います。ダビデは語りました。「彼(ヨアブ)は彼ら(アブネルとアマサ)を虐殺し、平和な時に、戦いの血を流し、自分の腰の帯と足のくつに戦いの血をつけたのだ。だから、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼のしらが頭を安らかによみに下らせてはならない」と。これに新約の光に当てますと、「彼は彼らを虐殺し、平和な時に、戦いの血を流し、自分の腰の帯と足のくつに戦いの血をつけた」と、ここまでは同じです。ですが、その続きは「だが、あなたは自分の知恵に従って行動しなさい。彼を赦し受け入れなさい」が主の御意思であると言えるのではないのでしょうか。

次に、7節を飛ばして8節、9節を見てまいります。また、あなたのそばには、バプリムの出のベニヤミン人ゲラの子シムイがいる。彼は、私がマハナイムに行つたとき、非常に激しく私をのろつた。しかし、彼は私を迎えにヨルダン川に下つて来たので、私は主にかけて、「あなたを剣で殺さない」と言つて彼に誓つた。だが、今は、彼を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人だから、彼にどうすれば彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせるかを知るようになろう。」と、ダビデが息子ソロモンに語っています。

ダビデの息子アブシャロムが謀反を起こし、自分が全イスラエルの王にな

つたと宣言した後、ダビデは息子アブシャロムとの衝突を避けるために、部下と共にエルサレムから去りました。ときに、ベニヤミン人のシムイが石を投げつけ、ひどい言葉を浴びせました。ダビデは、自分が犯した殺人と姦淫の罪を、神がシムイを通して罰しておられると受け止めました。それは、私共にとつて模範となる態度です。その後、アブシャロムが死んでダビデが王として復帰しますが、その際シムイが謝罪し、

ダビデは赦しました。これも素晴らしい行為です。ですが、ダビデにはシムイが行つたことの記憶が残っていました。当然と言えば当然です。その記憶をどう処理するかは、私たち一人ひとりが問われる課題です。ダビデは語りました。「だが、今は、彼(シムイ)を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人だから、彼にどうすれば彼のしらが頭を血に染めてよみに下らせるかを知るようになろう」と。うーん。残念です。もっとも、第三者だからそのような言えるのかも知れません。そうではあつても、私たちは「主の御意思は何なのか」を求めする必要があります。主の御意思を知って、それに従うか否かは個々人に委ねられた領域です。

私たちが世を去るとき、「主よ。すべてを備えてくださり、感謝します」と思つて、息を引き取ることができるようか。ぜひ、そうなりたいです。